

県中教研 英語部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 南島 啓
題 字 金山 泰仁 先生

新学習指導要領の全面実施に向けて

指導主事 窪田 俊介

昨年11月に小学校外国語活動の授業と中学校外国語の授業を同時期に参観させていただく機会がありました。どちらの授業も、“can”や「三人称」という言語材料を用いながら、クイズや有名人紹介等の言語活動に児童生徒が生き生きと取り組んでいる姿が印象的でした。その上で、「小学校の学習内容を踏まえた中学校の授業はどうあるべきか」について考えさせられました。

今年度より、小学校において新学習指導要領への移行期間が始まりました。移行措置の内容としては、中学年での外国語活動の導入、外国語科の内容を一部取り入れた高学年での外国語活動の授業の実施等が挙げられます。また、取り扱われる言語材料に関しては、「過去の表現」や「三人称の表現」といった、これまで中学校で初めて扱われていたものが含まれています。

小学校での学びを中学校の授業で発展的に生かすには、今まで以上に小中連携を意識した授業改善が必要です。そのためにも、小学校の授業でどのような語彙や表現が扱われ、どのような内容の言語活動が行われているのかを把握した上で、中学校の授業における言語活動を設定することが大切です。

また、言語活動に関しては、単なる言語材料の理解や練習を目的とするのではなく、英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な活動を重視する必要があります。その際、小学校で扱った語句や表現を繰り返し使用する場面を設定し、意味のある文脈でのコミュニケーションを通して活用を図りたいものです。

新学習指導要領の全面実施に向けて、「英語を使って何ができるようになるか」という到達目標を明確にし、小学校での学びとの接続を意識した授業改善を目指すことが大切なこととなります。

(西部教育事務所)

接続と連携

部長 梅澤 健一

昨年の8月、東海北陸公立中学校英語教育研究会石川大会に参加させていただきました。2年前の夏には、富山県でも開催され、記憶に残っておられる方も多いと思います。今回は、中学校だけでなく、小学校からの実践報告もありました。各県の代表者会議では、小中連携、小中高連携した研究を進めているという実態が分かり、連携をさらに推進する必要性を感じました。

現在、小学校では「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動が行われています。しかし、2021年の新学習指導要領全面実施に向けて、「書くこと」が取り入れられ、従来より中学校の授業に近づいた学習をしてきた児童が入学してきます。まずは、授業を参観させていただき、学習内容を把握することで中学校1年生へのスムーズな接続としたいものです。

今年度、県中学校教育課程研究大会の授業力向上アドバイザーとして、広島県立教育センター副所長 平木 裕先生をお招きし、「外国語科における学習指導要領改訂のポイント」について講義をしていただきました。先生が講義の中で何度も強調されていた言葉が、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて」です。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うキーワードであり、新学習指導要領に向けた私たちが考えるべき課題であると考えます。また、我々に求められる生徒の育成すべき力について、中教研学力調査問題の分析結果や県教育委員会から出されている「B問題」に取り組むことでも研究を進めることができると思います。目の前にある課題に1つ1つ取り組み、その接続をよりよいものになるよう実現していけたらと考えます。

(下・朝日中)

第62回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、立山町立雄山中学校を会場に、網谷健次郎教諭による3学年の研究授業が行われた。教科書本文のスピーチへの質問や感想をグループで考えて発表することで、コミュニケーション能力を高めることを目標に授業が展開された。まずCDの音声と網谷教諭の範読を聞き、ペアを代えながら本文の音読練習を行った。15秒チャレンジという時間設定により、生徒は意欲的に音読練習に取り組んでいた。その後、スピーチの内容についてのQ&Aをグループで作成した。その過程で内容が分からない部分を教え合う様子がみられた。作成した質問の英文を記入したホワイトボードを黒板に提示し、挙手をしたグループから順にスピーカー役の網谷教諭に質問をし、答えを受けて応答した。初出の英文でも解説なしで生徒たちが自主的に学べるよう、必要な生徒に対しては個別の配慮もあり、円滑にグループ活動が進められた。教師とのQ&Aでは他班のやりとりを見ながら英文を理解しようと努めていた。

部会協議①では、授業の視点に照らし合わせ、意見交換が行われた。東部教育事務所の上野郁行主任指導主事より、「話したことを書く、書いたことを話す」の両輪で進めることにより書く力もつけること、やりとりの即興性を考えると、ホワイトボードを用いずに音声での質問を聞き、答えるという方法も可能だったのではないかと助言をいただいた。また、各地区でも小中連携のあり方を工夫しているが、年間指導計画の段階から3年間で育てたい姿を意識し、先生方の話合いが深まるのが大切であり、例えば学校説明会に3年生が学校紹介を英語で行うことなどを提案された。部会協議②では、広島県立教育センターの平木裕先生より、学習指導要領改訂のポイントとして、「必然性のある場面設定」において、生徒が英語を「使い込み」、コミュニケーションを行うよう授業を日々改善すること等を分かりやすく教えていただいた。

水野 愛美 (下・入善西中)

■富山地区

富山地区大会では、富山市立芝園中学校を会場に、小林由衣子教諭と国際交流推進員による1学年の授業、藤原香教諭と櫻井崇人教諭による3学年の授業が提案された。

1学年では、自分の好きな人物を紹介し、それをきっかけにやり取りをする活動を行った。小林教諭と国際交流推進員によるモデル提示の後、4人班内の1つのペアがやり取りを行い、他の2人はその様子を観察し、アドバイスをした。そのアドバイスを基に、相手を代えて再度行ったやり取りでは、より自信をもって取り組む姿がみられた。3学年では、「外国人旅行者に買ってもらえるように商品を説明する」という設定で活動を行った。4人班で1つの店舗を営むこととし、旅行客役の先生方に後置修飾を含む英文を用いながら、自店のお土産を紹介する活動に取り組んだ。生徒たちは、ジェスチャーも交えつつ、商品のよさを説明したり、質問に応じたりするなど、積極的に取り組んでいた。両学年の授業ともに、指導者の役割分担が明確であり、分かりやすいモデル提示やゴールにつながる帯学習等、即興で表現する力の育成に結び付く工夫のある授業であった。

研究発表では、中川拓也教諭(新庄中)から「ライティングに効果を与える言語活動の工夫」、大村亮太教諭(三成中)から「スモールトークができる生徒を目指した言語活動の工夫」と題して研究の成果を報告していただいた。豊富な活動例の紹介やワークショップ等、有意義な時間となった。

指導主事の方々からは、「原稿なしでやり取りを続ける」「後置修飾をどのような場面で使うのか吟味する」「伝えたくなる場面設定を仕組む」「生徒の実態と目指すゴールに即した活動を段階を踏んで行う」「全国学力・学習状況調査に向けての授業改善」等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善の取組に向けて、得ることの多い研修会となった。

坂口 美也子(富・大沢野中)

【研究主題】 コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか
ー 4技能を総合的に育成するための言語活動を通して ー

■高岡地区

高岡地区大会では、射水市立小杉中学校を会場に、1学年亀田健太教諭とヤオ真由美教諭、2学年鈴木智子教諭とALTアーサー・ポリージャスによる、両学年ともに電話を題材とした授業が提案された。

1学年では、各自が今週と来週の架空の予定表を作成し、それを基に電話でやり取りをする活動を行った。亀田教諭とヤオ教諭による2種類のモデル提示の後、生徒がペアでやり取りを行い、他の者はその様子を観察し、アドバイスをした。そのアドバイスを基に、相手を代えて再度行ったやり取りでは、より自信をもって取り組む姿がみられた。

2学年では、「電話の取次ぎを頼む」「相手の誘いを受けたり断ったりする」という場面設定で3人班で役割を変えながら何度もやり取りを行った。相手の誘いを受けるか断るかをクジで決めるというやり方も生徒の関心を高めるのに効果的だったと思われる。生徒たちは、既習表現を活用しつつ質問に応じたりするなど、積極的にやり取りに取り組んでいた。

両学年の授業ともに、生徒が目指すべき姿を指導者が分かりやすくモデル提示していたことや、ゴールに向けての帯学習等、即興で表現する力の育成に向けて、工夫のある授業であった。

部会協議②の研究発表では、氷見市英語部会から「学びの円滑な接続を目指した小中連携の在り方」と題して研究の成果を報告していただいた。小中連携の紹介やワークショップ等、有意義な時間となった。

西部教育事務所の窪田指導主事からは、「やり取りを即興的に行う」「伝えたくなる、必要感のある場面設定を仕組む」「生徒の実態と目指すゴールに向けた活動を段階を踏んで行う」「全国学力・学習状況調査に向けての授業改善」等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善の取組に向け、実りの多い研修会となった。

矢野 清一（高・南星中）

■砺波地区

砺波地区大会では、南砺市立福光中学校を会場として、堀内隆志教諭とALTリチャード・バロン先生による3学年の研究授業が行われた。

「将来の自分」について、事前に学習したグローバル 이슈と関連させながら伝え合う活動だった。生徒たちは、写真を貼ったボードを相手に見せ、マッピングを頼りに即興で自分の思いや考えを伝えた。帯学習として1年次より続けてきたペアでの短い対話活動「Daily Skit」が今回の活動に生かされており、日々の取組の積み重ねがいかんにか大切かを示した授業だった。最初は自信がなさそうだった生徒も、相手を何度も代えて活動を繰り返すことで、自信をもって話せるように変容していった。生徒自身が成長を実感でき、達成感を味わうことができた。

部会協議①では、研究授業について付箋を用いて、授業のよかった点や改善点等を話し合った。西部教育事務所の室崎指導主事からは、「CAN-DOリストの見直しと活用」「自分の気持ちや考えを伝え合う言語活動の工夫」「全国学力テストに向けて」の3点について助言をいただいた。文法や言語材料を身に付けるためだけでなく、自分の考えや思いを伝え合う言語活動を仕組むことが大切であること、教師が地道な授業改善をすることが生徒の力を付けることにつながることを再確認できた。

部会協議②では、広島県立教育センターの平木裕先生から「コミュニケーションの目的・場面・状況」を明確にした活動の重要性を分かりやすく教えていただいた。『「教え込む」ではなく『使いつけ』授業』『相手の発話を聞き取り、即座に対応できる力の育成』『実際の生活でもあり得る場面設定』という視点で授業改善をしていく必要があるとご指導いただいた。

北村真理子（砺・庄西中）

各地区の取組から

富山市中教研「定期部会での取組」

富山市英語部会では、研究主題に基づき、各学校での日頃の実践事例を共有したり、研究授業や講演会等を実施したりしている。今年度は「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、相手の意向や考え等を理解し、情報交換や自己表現ができる実践的なコミュニケーション能力を養うための指導方法の工夫に重点を置きながら、主題の解明に取り組んできた。

6月定期部会では、東部教育事務所指導課の團千加子指導主事による「中学校におけるこれからの外国語教育—小学校の取組を踏まえて—」と題した講演を拝聴した。「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動の実践例の紹介や、実際の教材を用いての演習等、小学校の豊富な取組を教えていただいた。

1月定期部会においては、「全国学力・学習状況調査 英語予備調査（以下予備調査）」を実施した中学校の協力を得て、「話すこと」に関する問題の実施に係って想定される注意点や、生徒への具体的な指導について、共通理解する場を設けた。次年度の本調査に向けて、調査場面のイメージを具体的にもつことができたと思う。また、県教委作成の「予備調査 特徴的な問題—校内研修及び授業に生かすために—」を用いて、指導のポイント等を確認した。これまでの授業実践を振り返り、今後の授業改善の方向性を見出す貴重な研修となった。

今後は、小学校外国語活動における取組を更に把握して中学校での指導に生かすこと、そして、聞いたことを読みだしたことについて概要をとらえたり、与えられた話題について即興で話したりするなどの言語活動の充実を図るために、より一層研究を進めていきたい。

浦田 栄信（富・呉羽中）

滑川市中教研「本年度の取組から」

滑川市英語部会では、研究主題のもと、確かな学びを育むための授業実践の工夫について研究を進めている。生徒が目的意識をもって授業に臨めるよう、生徒が興味・関心をもてる課題を授業の始めに示すことや、学習したことを確認するために授業の終末に振り返りやまとめとなる活動を行うことを意識し、授業改善を行っている。

6月には滑川市立滑川中学校を会場に、作田恵美教諭による3年生の授業が行われた。「英語で電車での道案内をできるようにしよう」という学習課題を設定し、“Could you tell me how to get to ~?”などの定型表現を練習した後に、富山県内の路線図を用いて、外国人観光客と地元の人という役割で目的地までの行き方を尋ねたり、教えたりする活動を行う授業であった。富山県内の路線図を用いることで、実際の場面を想定しやすく、生徒はペアで協力しながら意欲的に取り組んでいた。また、既習である富山の名所紹介を活用し、富山の見所について伝える活動も加え、対話に広がりをもたせていた。授業の終末では、目的地等を変えて即興で対話活動をさせ、理解の確認を行った。

授業後の協議会では、①即興性のある活動を充実させるためには、事前指導を十分に行うことが大切であること、②限定した目的地から、生徒が自由に目的地を決めて対話を行うこと。また、さらに活動を発展させるなら、③白地図を生徒に与えて、自分で路線図を作らせながら対話を自由に考えさせること、④場面と指示だけを与えて対話をさせること、⑤1つの対話を5分間ずつ区切り、目的地を次々と変えて対話表現の幅を広げるなど、スモールステップによる即興的な活動への工夫について意見が出された。

これからの英語学習では、即興で情報を交換したり、互いの考えを伝え合ったりする力を身に付けさせることが求められている。今年度の研修で明らかになったことを踏まえながら、英語によるコミュニケーション能力のさらなる育成のため、生徒の興味に沿った課題の設定、必然的で即興性のある活動の工夫を図り、さらなる授業改善を行っていきたい。

作田 恵美（滑・滑川中）

黒部市中教研「本年度の取組から」

今年度の黒部市中教研英語科部会では、例年の授業研究に加えて、初めての取組として小学校の「英会話科」の授業を参観する機会を設けた。9月27日（木）黒部市立桜井小学校6年生の授業を中教研会員が参観し、その後、授業者の伊東啓一教諭（英語専科教員）と意見交換を行った。

授業では、We can! 2 Unit 4 “I like my town.”が扱われた。授業は、ALTとの挨拶、英語の歌、“I like ~.”と“I want ~.”を用いたパターンプラクティスを経て、本時の学習課題「自分の町・地域についての紹介」をワークシートに記入し、表現する活動であった。児童は、自分が住む黒部市にはない施設を述べた後、「~（という施設）がほしい」と表現する活動に、意欲的に取り組んでいた。

意見交換では、中学校英語科教員から、
・小学校児童がアルファベットだけでなく、英文を書いていたことに驚かされた。
・中学校の授業では、表現の正確性を求めるがゆえ、生徒の活発な自己表現を妨げることもある。しかし、小学校では間違いを恐れず、一生懸命に自分の意見を英語で伝えようとする児童の姿に好感をもった。
という意見が聞かれた。

伊東教諭の話によると、各単元を6時間（およそ2か月間）で実施する計画であり、アルファベットの練習や単語をなぞり書きする活動を計画的に取り入れているとのことだった。

小学校での表現活動を参観し、中学校においても、繰り返し表現する活動の確保が大切だと実感した。

少々の間違いがあっても、流暢さを意識した表現活動が、児童生徒のコミュニケーション能力の基礎を養うことにつながるのではないかと考えさせられた。

村田 真
（黒・鷹施中）

